
双月想話

双月 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双月想話

【Nコード】

N3277T

【作者名】

双月 奏

【あらすじ】

ごく普通な高校二年生の御巫 楓は幼馴染との関係に悩んだり、バイト先の後輩の女の子と仲良くしたりしながら「何か」に悩んでいた。

そんな楓に突如襲い掛かる異変。見知らぬ場所で突然獣に襲われる楓の前に突如現れる不可解な少女。
ラブコメ&王道ファンタジーに作者はオリジナリティを持たせる事は出来るのか！？

新月 満月

走る、走る……

口から心臓が飛び出そうなほど息が切れても

ただ走る、走る……

生きたい、死にたくない。

……………「なんでこうなったんだろう」

綺麗な満月が見えた。その光に照らされて、大きな、大きな、双
斧が輝いた。

ぼくは素直に「綺麗だ」と思った。

「じゃあまたな」

軽く挨拶して教室を出ると、見慣れた顔が廊下の壁に凭れて居た。

「おう、帰ろうぜ」

親友の金井カナイ 秀二シュウジだ。

「今日生徒会は？」

秀二は生徒会の副会長をやっている。見た目もすらつとして、背も高く、顔も鼻肩目に見てもかなりかっこいい。女子からの人気ももちろん高く。僕にラブレターを渡してくれだとか、紹介してくれだとか、頼んでくる子も後を絶たない。

「今日は特にやる事も無いしな。そうだ兎美でも誘って久しぶりに3人でカラオケでも行くか！」

兎美も親友の一人で、ぼく、秀二、兎美は昔からの幼馴染だ。

るから何か悔しくて……」

「その卑猥な表現は止めてくれ、マジで。それに、お前悔しいって言うなら混ざるか？」

一瞬、薔薇の中で秀二と抱き合う姿を想像してしまいゾツとして、報復に冗談を言ってみる。

「やーよ、ワタシ何かか混ざったらせつかくの絵面が壊れちゃうじやない？ 周りの乙女の夢をぶち壊すほど無粋じゃないわよ、ワタシは！」

あつさり否定された挙句、なんだか不気味な事を言われている気がしてならない。

「大体！ そういうの、秀二は似合っているかもしれないけど、ぼくなんか居たらそれこそ夢のぶち壊しだろう？」

「あはは、それもそうかー」

「おま、兎美、ちよつとはフォローしろよな！」

そうコイツが幼馴染の3人目。稲葉イナバ 兎美トミだ。

「そろそろコント終わったかー？」

横から傍観していた秀二に声をかけられてハツとする。

「お、おう悪いな」

バツが悪そうに秀二の顔を見ずに言った……。

「なーんか、こうやって3人で帰るのも久しぶりねー」

兎美が切り出した。

「ん？ ああ、そうだな、いつ以来だろう？」

ぼくは記憶を手繰り寄せるように思い出そうと試みるが、いまいち曖昧で、思い出せない。

「ホント二人が生徒会入ってから時間合わなくなったしなあ。いまや二人は生徒会長様と副会長様だもんなあ、ぼくみたいな平民には、到底敵わないや」

兎美がムツとした顔をして

「それを言ったらあんたのバイトの方が先じゃない！ ホント付き合い悪くなっちゃってさ」

「そりゃあ仕方ないじゃん、うち片親なんだし。ちょっと位働かないと、携帯も持てやしないよ」

「まあ、そうなんだけどさ……」

兎美が似合わない影のある表情を浮かべた事に、ぼくは、違和感を感じて居心地が悪くなり。

「じゃあさ、今度また3人でカラオケ行こうぜ！ ぼくが奢るよ、さつき秀二に誘われたのを断っちゃったのもあるしさ！」

「そんな気使わなくても良いのに、ただの思い付きだったし。大体奢りなんてそんな余裕あんのかよ？」

秀二がぼくをマジマジ見て言う。

「大丈夫だって！ 伊達にバイトばかりしてないしな！ なんだつたら飲み放題も付けちゃうぜ！」

「えー、最初は飲み放題付ける気無かったの？ ケチくさー」

兎美がそんな事を言うので。

「お前は少し遠慮しろって！」

頭を軽く小突こうと腕を上げた所で、あの日の事がよぎる。

「俺はお前の事が……」

「ワタシは……」

……

……

「おーい、何間抜けなポーズで止まっているんだよー？ ワキくすぐっちゃうぞ？」

言うと同時に既に手が伸びていて。

「やめ、やめろよ！ もう！ マジくすぐったいって！」

もがきながら兎美を引き剥がす。

「ホントお前ら飽きないよな」

秀二がクールに傍観していて。兎美とじゃれ合って。この時間が

すごく心地良くて好きだった。

「じゃあなー、楓。バイトがんばれよ！」

「カラオケの件忘れるなよー、楓！」

「わかった、わかった。じゃあまた明日な！」

ぼく、御巫ミカナギ 楓カエデはこの日まではごく普通の高校2年生だった。

「俺はお前の事が……稲葉兔美が好きだ！」

「ワタシは……」

秀二はこの後兔美を抱きしめた。ぼくがそこに来たのは偶然だった、何も見なかったようにただ逃げた。二人に気付かれちゃいけないと思って、ただ逃げた。

「はあ……」

「今日も普通に兔美とじゃれ合ってしまった」

あの出来事を見て以来、ぼくは、あまり兔美と仲良くしないようにと心がけていた。

二人は、あの時の事を何も言ってこない。だからぼくもどう接して良いかわからず、困っていた。もし二人が付き合っているのなら、あまり兔美と仲良くするのは秀二に悪いだろうし。例え付き合っても無くて秀二としては複雑だろう……。

だから出来るだけ昔みたいに仲良くしないつもりでいるのに、どうしても兔美のペースに吞まれてしまう。

「せくんぱい！」

「せんぱーい？ 先輩つてば！」

肩をゆすられ我に返る。

「あ、ごめん、ごめん！ ぼーっとしてた」

「なにか合ったんですか？ さつきからため息ばかり吐いて、雰囲気ですよ？」

明るく声を掛けてくれたのは小原^{コハラ} 祈絵^{オリエ}ちゃん。バイト先の後輩で1個下の小柄で可愛い子で、人懐っこくて、秀二とは違った意味で誰にでも人気のありそうなタイプだ。

「いやさ、お腹すいたなーって。今日バイト来る前なんにも食べられなかったから」

テキトウな事を言っでごまかした。

「あー、あります！ あります！ そういう時はホントお腹鳴るのを抑えるのが大変で……あ、いらっしやいませー！」

お客さんにも明るく元気な声で応える姿が妙に微笑ましく見えた。「先輩！ 悩みがあったら相談してくださいね？ あたしで良ければ力になりますから！ あ、あとこれ良かったら……」

ポケットから何かを出して僕に投げた。

「それでも食べてがんばってくださいね！ サボつてばかりいちゃダメですよー？」

悪戯に笑ってレジへ走って行った。

手のひらにはキャラメルが二個……こっそり一個口に運んだ。

「よし、がんばりますかー」

少しだけ元気がでた。

「おつかれさまでした！」

バイトが終わりいつものように挨拶して家路に付こうとすると。

「先輩！ お疲れ様です」

さつき癒された明るい声に、挨拶された。

「祈絵ちゃん。お疲れ様！ さっきはありがとね」

キラメルの包み紙を見せる。

「いえいえ、いつもお世話になってますし。あたしも良くお腹空いちゃうので、実は常備してこっそり食べているんですよ」

えへへっと、少し恥ずかしそうに元気な笑みを浮かべた。

「じゃあまあ、お礼に今日も送って行きますかね！」

家もわりと同じ方向で、たまに送ったりしていたので、お礼にもならない様な事なのに祈絵ちゃんは……。「本当ですか！？ ありがとうございます！ 何かいつも、いつもご迷惑じゃないですか？」

なんて言う。ホント素直でいい子だなあと思いつつ。

「大丈夫だって！ 気にしない、気にしない」

「やっぱり夜は物騒だし、女の子一人で帰らせるなんて世間様から白い目で見られちゃうしね！」

まあ本当は自分も一人で帰るのは寂しいなんて裏もあるわけだが……。

「あはは、ありがとうございます。前も話しましたが、ちょっと怖いところなんですよね、あの十字路早く電灯直らないかな」

「あー、あそこ怖いよね。いかにもって雰囲気たっぷりで」

うらめしや〜のポーズで祈絵ちゃんににじり寄る。

「もう、やめて下さいよー。ホントに怖くなるじゃないですか！」

「ごめん！ ごめん！ ついね」

からかいたくなっちゃうんだよなあ……。兔美の時といい、こういう気質なのだろうか。

「さー！ 帰ろうか！」

明るく、明るく。心を悟られないように、さっきみたいに心配かけないように。

店を出て、家路を急ぐ。駅前、公園、住宅街、少しずつ人気も少なくなる中、可愛い後輩と自分の学校の事、友達の事、他愛もない

テレビの話、こんな時間も悪く無い。でも頭の片隅にアノ出来事がちらつく時がある。そんな自分が贅沢で、すごく小さな人間に思えてすごく情けなくなる。どうしてこんなに不安で不満なのだろう？決して自分は不幸では無いはずなのに……。

「それでね、先輩、がつつり蜂蜜練乳ジュースがですね」
びゅつと風が吹いた。

「きやつ……」

短い悲鳴の後、スカートを押さえ恐る恐る、祈絵ちゃんが、こつちを伺っていた。

「見えました？」

「ん？ 大丈夫、この暗がりじゃさすがに見えないよ」

もうちよつと明るい所で吹けよ風！ と思っただのは内緒だ。

「あはは、ですよー。セーフ、セーフ。今日ばかりは街灯が直ってないのに感謝ですね」

いつの間にか例の十字路に立っていた。

「先輩？ どうしたんですか？ 急に黙って……ねえ、先輩？」

急に静寂に包まれ、世界に二人だけのような感覚になった。

「ねえ……祈絵ちゃん」

静かに呟く。

また静寂、そしてゆっくり手を前に持って行き

「僕の手どこー？」

ワイシャツだけになった袖を見せる。

「……」

「きやあああああー」

思っていた以上の大音量に体が固まる。

「え、あ、ごめん。冗談！ 冗談だから！！ 落ち着いて祈絵ちゃん。落ち着いて！」

このままじゃ、僕が変質者だ。ご丁寧に近くに痴漢、変質者に注意の張り紙もある。ここでこの悲鳴は非常にまずい。

「えぐ、すん、うぐ、うっ……うっ……酷いですよ、せん……ぱい

「いい……………」

「やばい、しかも泣いてる!？」

「ごめん! 本当ごめん! とりあえずあっち行こう」

とりあえず明るい自販機の前へ連れて行きテキストウなジュースを買って渡す。

「ごめんね! 本当にごめん! ちょっとだけからかおうと思ったら、まさかあんなに怖がるなんて……………」

泣くほど怖がるなんて本当に失敗だった。なんとかして挽回しないと……………」

「いえ、あたしも取り乱してしまってますいません。でも一応、女の子なんですよ、あたしだって……………」

「そうだよね、マジごめん!」
勢い良く頭を下げる。

「このお詫びは絶対するから……………」

ゆっくり顔を上げると、まだ少し鼻をぐすぐすさせている祈絵ちゃん

「絶対ですよ?」

「ちよつと呆気に取られてしまった。

「お詫び! 約束ですからね! ホントに恐かったんですから、期待しちやいますよ?」

良かった、挽回のチャンスはくれるみたいだ。

「うん、祈絵ちゃんが満足するまで何でもするから! ホントごめんね」

「もう、良いですよ。御巫先輩はあたしを傷つけるつもりで、そんな事する人じゃないってわかっていますし」

さっきまで僕を癒してくれていた笑顔がそこにはあった。

「じゃあ、またね」

祈絵ちゃんの前まで送り届けてさよならを告げる

「ありがとうございました! 約束忘れないでくださいね?」

ありがとうなんて言われる資格なんて無いだろうに、祈絵ちゃんは本当いい子だ。

「うん、約束な！ 次会う時までには何か考えておくよ」
また祈絵ちゃんとはびっきりの笑顔を見せて。

「楽しみにしています。それでは、おやすみなさい。帰り気をつけて帰ってくださいね？」

はあ、ホントに祈絵ちゃんは優しいなあ。それに比べてぼくは…
…また、自己嫌悪に陥る。

「おやすみ！ またね！」

明るく言って顔が見えないように振り返る。祈絵ちゃんは曲がり角まで見送ってくれているようで、曲がり際に振り返りもう一度手を振った。

「はあ、さつきは失敗だったなあ」

まさか泣かせちゃうとは思いつかなかったので、すごく後悔していた。

でも祈絵ちゃん可愛いよなあ。明るくて、優しくて、気が利いて、ちよつと恐がり、で、兎美とは大違いだ。

「クスッ」

自然と笑みがこぼれた。明るいところなら変な人かもしれない。でも暗かった、必要以上に暗かった。あの十字路だ。

「うわ、真つ暗だな、こんな暗いと危ないよなあ本当」

あまりの静けさに思わず声に出して呟いてしまった。

「あれ、なんだ……これ……」

音がまったくくしない、どこを見ても光が見えない、暗い、暗い、暗い……ひたすら暗い。漆黒のような闇、自分が立っているのか、浮いているのか、沈んでいるのか、それすらもあやふやになるような闇。

「おい、誰か、誰か居ませんか？」

確かに喋ったはずなのに声が聞こえない。急に寒気がした。体が

恐怖に硬くなつていくのがわかる。寒いのに汗が噴出す。なんだろう？ なんだろう？ 頭が理解してくれない。とにかくやばい、何がやばい、とりあえず光だ、光が無いと何も出来ない。

その時、ポケットが輝いた。

「携帯だ！」

急いでポケットを弄り携帯を取り出す。着信の画面になっていた

「兔美？ 助かった」

なんだか異様な安心感を覚えて着信に出る。

「兔美！ 兔美！ 何か変なんだ、うちの家の近くの十字路が急に真っ暗になつて何も見えなくて！」

しかし何の音も聞こえなかった。急に不安が溢れ出す。

「兔美！ 兔美！ 聞こえるか？ なあ返事してくれよ！ 頼む！ くそ、なんなんだ？ これ！ 兔美！ 兔美！」

叫んでいる感覚も、汗が垂れる感覚もある。だけど音が、光が無い。携帯の光ですら吸収されているようで何も周りが見えない。しばらく叫んで居たがついには通話も切られてしまった。

「切れた……何なんだよ……一体……」

びゅっ。

「風？」

そういえばさっきもこんな風が吹いたような……。

びゅっ、びゅっ。

「なんだ？ これ……風？ 吸い込まれている？」

最初はまばらだった風が、段々強くなつていく。

「え、あ、なんだこれ！ うわ、うわああああああ」

ビュゴーーーーーっと言う大きな音とともに、

何かに吸い込まれて、そこで意識が途切れた。

「楓のやつ、なんで何も喋らなかつたんだろう。話したい事あったのに……」

パジャマ姿の少女は携帯の待ち受け画面を眺めながら呟く。

「はぁ………楓………」

ため息と共に、携帯をパタンと閉じると、そのままベッドに倒れこんだ。

「……………つつ」

頭がズズキして瞼が重い、体も酷く痛い気がする。何が起こつたのだろうか？ さつき真つ暗になってそれで？

こめかみを押さえながら起き上がる。寝ていたのか、ぼくは。理解するのが後になる、その感覚が恐い。

「……………森？」

どう見ても木々が生い茂って、草だらけで、元居た十字路では無かった。

「なんだ、一体何が起きたんだよ？ さらわれたのか？ ぼく」

それにしても森に捨てられているのはおかしい気がする。それにこんな暗い中下手に動き回ったら危ないよな。せめて夜が明けるときここに居るか？ でも、もしさらわれたなら犯人がここに戻ってくるかもしれないよな。

「くそっ！」

考えても、考えてもどうするべきかもわからない。

「ぼくはどうしてこうなんだろう」

ふと空を見上げると綺麗な満月が浮かんでいた。

「な………なんでだ………」

さっきまであんなに暗かったのは新月だったからじゃないっけ？
ぼくの見間違いか？ いや、あんな明るい月は上がってなかった、
間違いない。ぼくはそんなに眠っていたのか？

そんなわけないよな？ 今日は何日だ？ 確かめる術は……
「携帯！」

急いで取り出して、画面を見る。

日付は変わっていない、時間も兎美の着信から十分も立っていない。
また理解が追いつかない。なんでだ？ そんな短時間でこんな
森に来られるわけが無い。ありえない事ばかりで頭がどんどん混乱
していく。

「そうか電話！ って圏外かよ！」

希望が芽生えては潰れる、不安が膨らんで押しつぶされそうだった。
た。

ガサガサつと草が動いた。

「……誰！ 誰か居るの!？」

音のした方にゆっくり両手を挙げて、敵で無い意思表示をしなが
ら声をかける。

「あの〜？ すみません道に迷ってしまつて。怪しいものじゃない
んです。助けてください」

ゆっくり、ゆっくり距離を縮める。

「フー、フー」

息が荒い、向こうも興奮状態なのかな？ まさか僕と同じで急に
連れてこられたとか？

とにかく人が居ればなんとかなるかもしれない。

「グルルルルル………」

グルルルルル？ あれ？ この音って。

「うわあ!？」

黒い影が飛び出して来た瞬間腕が熱くなった。

「な、熱っ！ へ、切れてる!？」

ワイシャツに切れ目が入って血が滲んでいた。

また理解が追いつかない、何が起きた……何が？ 黒い影……？
まだ終わってない！？」

「グルルルル……フー、フー」

犬？ 野犬か……まずいよな、この状況。僕って餌かなやっぱ。
さつきとは違う方向でガサガサッと草が動く

「……………」

嫌な予感がする……この音……。

「フー、フー」

ああ、デジャブが……逃げられるか？ とりあえずこのままでは
まずい、どっちかが動いた所で逃げよう。

感覚を研ぎ澄ます。どっちが動く？ どっちが？ どっち……。
ビュウ！ っという音が聞こえた気がした。

後ろが動いた。

「うわあ！？」

避けるのに精一杯で走り出すなんて出来なかった、そのままよろ
けた体勢で転げるように逃げ出した。

「はあはあ……くそ、四足歩行早すぎるだろ！ うわあっ！」

何度も噛み付かれそうになるのを避けながら逃げる、ひたすら逃
げる。

「はっ……はっ……何なんだよ、これ、いきなり！ はっ……どう
して!？」

走る、走る。どれくらい走っただろう？ このペースならマラソ
ン大会で秀二に勝てたんじゃないだろうか、そんなくならないこと
が頭をよぎった。

「はあ……はあ……どこまで逃げれば……ダメだ、あいつら狩りを
楽しんでいる」

瞬間、頭をよぎった。今になって気づく。「死」がこんなに身近
に迫ってきた事に。

ぼく、死ぬのか？ そんなの嫌だ、不安と不満だらけの毎日だっ
たけど、あの時間が確かに好きだった、もっとやりたい事も合った

！ 死にたくない！ 死にたくない！
走る、走る……。

口から心臓が飛び出そうなほど息が切れても
ただ走る、走る……。
生きたい、死にたくない。

「………」

「ズシャーッ」

「つう………」

足がもつれて視界がぐるりと回り、足首に激痛が走った。

「うあ………」

声が詰まる。すぐそこに野生を感じさせる獰猛な獣が二匹。

「やめろ、来るな！ あっちいけて！ オイ！」

その辺の飼い犬に絡まれた時に言うような台詞を言ってみる。

「そんな事言つて、聞いてくれるわけないよな」

何か、何か？ 出来ないのか？ 生きたい。生きたい。生きたい。
生きたい。

く、来る！？

「う、うわあああああああ！！！！」

ドシャッ、鈍い音が響いた。腕がジンジンする。僕、生きている
？ 太い木の塊が手に握られていた。

「グルルルル………」

「………」

「怒ってます？ 怒ってますよねー」

こんな時まで、ぼくはなんて滑稽なのだろう。生きたいのに、生
きたいのに、生きたいのに。

「くそ！ くそ！ 来るな！ 来るなあ！！！」

ひたすら木の棒を振り回す。ただがむしゃらに。

「グルルルル……ガフウ」

手のひらに衝撃が走って、急に軽くなった。

「バキィ！」

何かの碎ける音。ああ、さっきの棒か。あの顎ならきつと骨までおいしく頂いてくれるのだろうか。

「くそ、また諦めてるなあぼく。最後までこんなにかぼくは」

ああ、ダメだ。何も考えられない。頭が真つ白だ。死ぬ？ 死ぬのか？ 走馬灯とか色々見えるもんじゃないの？ ダメだ、死しか浮かばない。ダメだ、ダメだ、ダメだ。

「グルルルルル……ガウ」

「ガウ」

来る、きつと今のは合図だ。

これで終わる。死ぬのかぼくは。

ひゅっ、という音と共に走り出した。やけに、ゆっくり見える。

やけにゆっくり……。ビュッ。瞬間何か横に抜けて犬が消えた。

「え？な……」

「もう！ 夜中にこんな森の中を探し回ってどういふことなのよ！」

真夜中の森の中似つかわしくない着物の少女が鮮やかな金色の長い髪を満月に輝かせて歩いていた。

「いくら相手が夜行性だからって、もっと他にやり方無かったのかしら……」

「……ああああああ」

「悲鳴？ やつと見つけた！」

着物の少女は森の中、悲鳴の方へ颯爽と駆け出した。まるで太い幹の木も生い茂る草花もまったく無いかのよう。ただ駆けて行った。

さつきまで自分に襲いかかろうとしていた犬が消えた。いや、吹っ飛んだ？　そして視界には突然、着物が飛び出してきた。

「あ、人！？　助け、助けてください！」

しかし、次第に状況がおかしな事に気付く、腰まである長い金色の髪に見事なまでの着物

そして線の細いしなやかな体。

「え、あ、女の人！？　逃げて！　ここには凶暴な野犬が二匹居ます。危ないから逃げて！」

少し沈黙して……………。

「男かあ、まずいなあ……………でも見過ごせないし」

……………？　何がまずいのだろうか？

「そのあなた！　足を怪我しているみたいだけど、治療術くらい使えるでしょ！　早く治して逃げなさい！」

何を言っているのかまったく理解出来なかった。

「へ、な、何？　無理です。動けなくて！　あなたこそ危ないです。逃げて！」

「仕方ない……………か」

気付くとさつき吹っ飛んだ犬が戻り。再び二匹の犬がこちらに向かって構えていた。

「ガウ」

「ガウ」

さつきの合図だ。このままじゃあの子も危ない。

「来ます！　逃げて！」

叫ぶと同時に犬たちが走り始める。思わず目を伏せる。

ドカ、バキイ、グシャア。ドラマやアニメでしか聞いた事のない、効果音が流れる。肉が潰される音、骨が碎ける音、犬が吹き飛ばさ

れ地を滑る音、どれも現実味が無い。

おそろおそろ目を開けると。

「はあ！ てい！ たあ！」

可愛らしい声で着物の女性が鮮やかな金色の髪を振り乱し、犬達を殴り、蹴り飛ばし、圧倒していた。

「……………」

声が出なかった。

「たあああ！」

一際気合の入った声の後一匹の犬が倒れた。さらに間髪いれずもう一匹の犬も襲い掛かるが、そのまま殴り飛ばされ倒れてしまった。「ふう…………この子達は違つたのかしら？ まあ人が襲われていたんだし、不可抗力よね？」

自問自答している少女が振り返つた。

「あなた大丈夫？」

振り返つた彼女の動作と月に照らされた金色の髪があまりに綺麗でただ見とれてしまった。

「ちょっと！ 大丈夫？」

「あ！ えつと、すみません。足を怪我しちゃつたみたいで。助けを呼んでももらえませんか？」

いつの間にか近づいて居た彼女にドキドキして、視線をそらして答える。

「もう、治療術も使えないの？ ほとんど常識なのに…………助けなんて呼ばなくても今治してあげるわよ」

治療術？ さっきもそんな事言っていたみたいだけど何のことだろう？ 応急処置みたいなものかな？

「じつとして。あなたも傷が治るのを想像して」

「へ、傷が治るのを！？」

思わず間抜けな声が出てしまった。

「そう！ その方が治り早いから」

なんだろう？ メンタル的な話だろうか…………。そう言いながら彼

女が傷に手を添える。触れた手が暖かくて心地いい。

「すう」

彼女が大きく息を吸うと、突然彼女の手がぼんやり輝いた。

「えー!? な! 何を!? 手、光ってる!?!」

どうやらまだ理解できない事が続いているみたいだ。

「何って治癒術じゃない! 見たことも無いの!?!」

彼女が驚いたように、どこか呆れたように聞いてくるので、なんだか知らない自分が恥ずかしくなった。

「見たこと……無いです」

「ええ!? 本当に見たこと無いの? あなたどこの出身?」

そうだ、ここの事を聞かないと

「東京です! 東京の練馬区で、突然周りが真っ暗になって、気付いたらこの森に! ここはどこなんですか?」

「ちよつと落ち着いて! トーキョー? ネリマク? 聞いたこと無いなあ。ここはセラヴィスの森よ。ここを南に抜けるとセラヴィスの村があるの」

セラヴィス!? なんだそれ、外国なのかな? でもこの人、日本語で喋っているよな? 着物だし、でも東京も練馬区も知らないって日本人であり得るか?

「すみません。セラヴィスって一体? なんだか突然いろいろ起こつて、僕も状況が良くわかって無くて。この辺の事とか詳しく教えてもらえませんか?」

「うーん」

少し少女が考えた所で不吉な音が聞こえてきた。

「グルルルル……」

「ありゃ、さつき確かに仕留めたのに、どうやら当たりだったみたいね」

少女が振り返り、いつの間にか起き上がった犬二匹と向き合う。

「もう立てるよね? 走るよ! 着いて来て!」

突然彼女が走り出した。

「え、ちよつと!?!」

あわてて立ち上がる。

「立て……る?」

何故だか、さっきの怪我はすっかり治っていた。これが治癒術と
いうやつなのかな。

「あ!」

考える暇は無かった。犬が飛び掛って来る。

「早く!」

彼女の声が出た方に走る。この走りにくい森の中、足が何度もも
つれる。それなのに彼女は何の気も無しに走っていく。後ろから犬
達の足音が付いて来る。

「うわっ!」

飛び掛る犬の攻撃をかわしながら走る。ただひたすら生きるため
に走る。

「はあ……はあ……はあ……」

しばらく先に、彼女が立ち止まっているのが見えた。

「そっち!　そこで隠れていて」

そこは拓けた障害物の少ない広い場所。周りを木々に囲まれた、
森の闘技場の様に見えた。

中心を月明かりが照らしている。僕は言われるがまま近くの木陰
に身を潜めた。

彼女は、慌てる事無く、ゆったり手のひらに力を込めている。

先ほどの治癒術の時の様に手がぼんやり光る。

光が段々と強くなり一際輝くと、突如、彼女の身長程ありそうな
巨大な双斧が現れた。

「な、なんなんだよこれ……」

ぼくの現実ではこんな事はありません。手品でも見せられている
のだろうか……

しかし目の前の光景は刻一刻と進んでゆく。彼女は巨大な双斧を
軽々と二、三度振ると犬二匹と向き合う。

「ガフウ！」

一際大きな一吠えが響くと、二匹は同時に着物の彼女に飛び掛った。それを正面から向かい打つ彼女。

双斧の一咫で一匹を吹き飛ばすと、その勢いで回し蹴りをもう一匹に決める。あれだけの素早い野生の獣がまるで相手になっていない。その現実がぼくには理解できなかった。

「さてと……」

彼女は呟くと。また力を込める。双斧が光を帯びてゆく。

のそのそと起き上がる一匹の犬に飛び掛り双斧を叩きつけた。犬は真つ二つに引き裂かれる。しかし、血が噴出す訳でもなく。肉が飛び散るわけでもなく。黒い霧となって霧散してゆく。

彼女の背後にもう一匹の犬がすごい勢いで迫って居た。

「危ない！」

ぼくは思わず叫ぶ。

しかし彼女は慌てる事なくゆったりと振り返り、双斧を一拍り……飛びかかるうと跳ねた犬を、またしても真つ二つに切り裂いた。

犬は彼女の前でまたしても霧散する。そして彼女の双斧からも光が宙に散っていた。

その光が月明かりに照らされ幻想的に彼女の金色の髪を透き通らせる。

背後には綺麗な満月が見えた。その光に照らされて、大きな、大きな、双斧が輝いた。

ぼくは素直に「綺麗だ」と思った。

帰り道

「ふーんふふーん」

折絵は湯船の中で陽気に鼻歌を歌う

「御巫先輩、何してくれるのかなあ……」

楓の身に起きている事を知らない彼女はのんきに未来を考える。

「明日のバイト楽しみだなあ……」

「ねえ、君。大丈夫？」

目の前には透き通る金色の長い髪に、不釣り合いな程艶やかな着物の少女。

「あ、はい……何とか……君のおかげで……」

あまりの現実離れし過ぎた光景を目の当たりにしたばかりは、まだ何が起きたのか理解する事が出来ずに居た。

「肩も怪我してるね、今治してあげる」

そう言っつて、腰を抜かして座り込んでいるばかりに、高さを合わせるようにしゃがみ込み、先ほどの犬みたいな奴に付けられた傷に手を当てると、またあの光がぼんやりと浮かぶ。

その光に照らされて彼女の顔が見えた。

白く透き通る様な肌に大きな二重の目はエメラルドグリーンで本物の宝石なのではないかと思う程キラキラして思わず見惚れてしまう。

「君、傷が治るのを想像してる？」

気付くと神秘的な目はぼくをじっとりと見ていた。

「あ、すみません。治るの想像するんですよ……あはは」

傷口が塞がる様子を目を閉じて考える。傷の無い時の自分の肌を想像……想像……

「本当に君、治療術知らないんだね？ 普通これくらいの傷すぐ治るんだけどなあ」

彼女は少々呆れたように言う。

「すみません。と言うか正直、今何が起きているのかも良くわかっていなくて……僕の常識ではありえない事ばかりなんです。何にも無いところから斧が出てきたり、獣が霧のように消えてしまったり……」

「あはは、確かにリンドヴルムや魔物は珍しいかもね」

彼女はどこか慌てたように目を細める。

「と言うか何の力も無い君みたいなのが、何でこんな時間にこんな森をうろつろしているのよ！」

思い出したように声を荒げる彼女。

「そ、それは……それも良くわからなくて、気付いたらこの森に居たんです。元々はバイトから家に帰る途中だったはずなのに！ 突然十字路で暗闇に包まれて！」

自分でも何を言っているのかわからない。それぐらい混乱していた。

「バイト？ 君の言う事は時々良くわからないなあ……もしかしてどこか違う国から飛ばされた？」

「いや、あなたの言う事も全然良くわからないですよ！ リンドヴルムとか！ 魔物とか！ 飛ばされるってそんな事ありえるんですか？」

「う、うーん飛ばされたって言うのは冗談のつもりだったんだけど……」

ちぐはぐな問答をしているうちに彼女の手の光が消える。

「はい、治ったよ。立てる？」

傷口はすっかり塞がり痛みも無くなっていた。さっきの足と違って目に見えるため、余計に不思議に思える。

「はい、なんとかか……その、ありがとうございます」

彼女の吸い込まれそうなエメラルドグリーンの瞳は月明かりだけになっても輝いているように綺麗で、目を見てお礼を言うだけなのに照れてしまう。

「で、これからどうするの？」

「あ、えっと……」

どうしよう？ そんなのこっちが聞きたい。ぼくはどうしたらいいんだ？

「行く当てがないのなら、とりあえず付いて来る？ それともこの森に残る？」

彼女は意地悪く問いかける。

「付いて……行きます」

ぼくには選択肢なんて無かった。手がかりも何も無い中、こんな森で見放されて生き残れる自信なんて無い。

「よろしい。じゃあちよつと歩くけど行きましょう。わたしの名前はエルフィオレ・サラブライト。大抵の人はエルフィとかエルって呼ぶわ。あなたの名前は？」

やっぱり日本人じゃないのか……ハーフとかでも無いみたいだし、不思議な人だ。

「ぼくは御巫 楓。みんなは楓って呼ぶよ。えっと……エルフィ」

「じゃあよろしくね、楓。後は道すがら聞くわ」

そう言って手を差伸べてくれる。

「あ、ありがとう。こっちこそよろしく」

どろどろになった汚い手をスボンで払って差伸べられた手を握る。彼女の手は温かくて少しだけ安心できた。

それから、彼女について歩きながらこれまでの経緯を話した。どうやらココは、ぼくの居た世界では無いようだった。

「まさか異世界から来たなんてね……さすがにわたしも信じられないわ」

どうやらエルフィもこういったことは始めての様で、また不安が

溢れ出して来る。あんなに不可思議な力を使う人間にも分からない事。一体何が起きたんだ……。

「ぼくもまったく信じられないです。今まで起きた事全部、アニメとかマンガの世界の出来事みたいで……ハアハア……」

森を歩く。というのとはとも体力を使う草木を掻き分け、落ち着きの無い足場を踏みしめて歩く。エルフィは何も気にせずスタスタ進む。ぼくは情けない事にこの少女に付いて行くのでいっぱい、いっぱい、だった。

「アニメ？ マンガ？ 楓の世界の言葉っていまいちわかんないなあ」

それはお互い様なのだけれど……。

「リンドヴルムとか魔物とか治癒術とか、実際目にしてもまだ信じられないよ」

正直に言って、現実味が無さ過ぎる。この話を知り合いにしたところで夢でも見たのだからと笑われるだろう。

「ま、まあ、リンドヴルムと魔物はこっちの世界でも結構特別だから……でも、治癒術が使い無いつて言うのは不便よね。怪我したらどうするの？」

本当に治癒術は誰でも使えるのか……本当に不思議な世界だ。あんなのが誰でも使えたら怪我で死ぬなんて無いんじゃないだろうか？

「そりゃあ消毒して、傷口に菌が入らないように絆創膏貼ったり、包帯巻いたり、酷かったら病院行って診てもらったり……」

「絆創膏？ ー！なんとなく分かるんだけどやっぱり不便そうだね」
そりゃあ、あんなに便利な力があればなあ……

「それが当たり前だったから不便に感じた事は無いけど、治癒術なんてあつたら世界の在り方が変わっちゃうかもね」

「えー、大げさ！ 楓もコツさえ掴んじやえば簡単に使える様になるよー！」

そうエルフィは簡単に言っただけ。

「そうは言うけど、ぼくにはエルフィみたいな不思議パワーは無い

よ？」

「ぼくは特別ななんかでは無い。良くも悪くもいたって普通だ。」

「不思議パワーって……わたしを変な人みたいに言わないでよね。わたしだって普通の女の子なんだから」

「ぼくの普通では、女の子があんなでつかい斧振り回して、魔物とかいうのを殴ったり、蹴ったり、ぶつた切ったりはしないの！」

「ちょっと凶暴でも兎美程度。もっと大人しい子なら、ちょっと脅かしたぐらいで泣いてしまう様な可愛らしい折絵ちゃん。ああいうのが『女の子』だ。」

「そ、それは仕方無いじゃない。それに、わたしがやつつけなかったら、今頃楓はどうなっていたのかな？」

「う……それを言われると返す言葉もございませんけども……」

「けども？」

エルフィは振り向いてぼくの顔を覗き込む。なんとも意地の悪い顔で……

「な、なんでもありません」

エルフィの顔はどんな表情でも綺麗で、どうしても正面から見られると緊張してしまう。

「ふふん、よろしい。楓って何か面白いよね。弱いのに生意気だし」

「事実だけど酷い言われようだ。」

「わたしが駆けつけた時も『危ないから逃げて！』とか、足を怪我して自分が一番危ないのに、良く言えたもんだわ」

「あの時は必死だったから、そんな事考えている余裕も無かったよ」

「考えないで他人を気遣えるなんてすごいじゃない！ 普通なかなか出来ないわよ？」

「そんなものだろうか、でも結局は助けてもらったわけだし、自分には何も出来なかったと思うと、悔しさが残った。」

「すごくなんて……無いよ。ぼくには何も出来なかったわけだし」

正直な気持ち。こんな卑屈な事言ってもどうにもならないのに、

何故だか口にしてしまった。

「ふーん、わたしはすごいと思ったんだから、それで良いと思うけどな」

エルフィはくるりと振り返り、スタスタ歩き続ける。その表情が見えないのが少し不安に思えた。

「えーと、ちなみに後どれくらいかかるんでしょうかエルフィさん……」

肩で息をしながら、未だに森から出られずに居る事が足を重くする。

「そうねえ、森から出るのに一時間、それから、わたしの住んでいる所まで二時間かな」

軽々告げるエルフィ、この世界の人間は体力も段違いなのか……「すみません……少し……休憩を……」

やっぱり情けない。ぼくはひたすらに情けない。どうせこんな変な世界に飛ばされるのなら強い力もくれれば良かったのに……特別な……ぼくだけの……チカラ……

「そうねー、一度休憩しましょ……って楓!？」

もう一度振り向いたエルフィがぼくを見て驚きの声を上げる。

「な、なに!？」

「何って、手! 何でその光が使えるのよ!？」

そう言われて自分の手を見ると両手が、エルフィが不思議な現象を起こす時と同じように光っていた。

「うわ、なんだこれ!？ なんで急に!？」

慌てて手をブンブン振り回すが光は強くなる一方だった。

「すごい光……あなたわたしを騙したの?」

「騙すって何!？ と言うかこれどうしたら!？」

光がどんどん強くなる。得体の知れないそれが恐かった。

「とりあえず落ち着いて! その光は可能性なの! 何か想像してみて!」

想像? 想像って何を想像したらいいんだ? くそ、ぼくはこう

いう突然の出来事に弱いんだ……そうこう考えているうちにも光は強くなっている。

「う、うわあああああ！！」

一際光が強く輝いた。あまりの光に目を閉じる。

「そ、それって……」

暗闇の中エルフィの驚嘆の声が聞こえ、恐る恐る目を開ける。

ぼくの両手には一丁ずつ真っ白な拳銃が握られていた。

「リンド……ヴルム……？」

エルフィも理解できずにぼくの手を見つめてただ驚愕していた。

「はあ、なんなの楓って……」

森の小道、大きな木の腰掛けて、ぼくの手握られた銃を見つめるエルフィ。

「ぼくにもさっぱり……まさかぼくにまでこの変な力が使えるなんて」

リンドヴルム？ と呼ばれたこの銃は一体なんなのだろう？ ま

さか力が欲しいなんて考えたから出てきてしまったのだろうか？

でもそんな簡単なものなのか？ リンドヴルムって……

「リンドヴルムにしては小型で威力も無さそうよね、それ」

エルフィは興味津々という様子でさっきから不思議そうに目をキラキラさせている。

「まあ拳銃だしなあ……威力は……どうなんだろう？ 打ってみないとわからないや」

拳銃なんてまた物騒な武器だよなあ、正直こんなもの持っているだけで怖い。

「けん……じゆう？ それ楓の世界の武器？ 打つって何を打つの？」

どうやらこの世界に拳銃という武器は存在しないらしい。唯一の頼みのエルフィがこんな調子で大丈夫なのだろうか……

「そう、ぼくの世界の武器で、ここの引き鉄を引くと火薬が爆発して弾丸を打ち出すんだけど……」

こんな不思議な状況で出てきた物にどれだけぼくの常識が通じるのやら……

「ふーん、ねえ、ちよつと打つてみてよ！」

エメラルドグリーンの目を月明かりにキラキラ輝かせ無邪気に恐い事を言うエルフィ。

「嫌だよ。危ないじゃないか！」

ぼくは拒絶する、得体の知れない物には、無闇やたらに弄らない。これは平和にやり過ぎす為の常識だ。

「えー、でも自分の武器を把握しておかないと、いざって時戦えないよ?」

う……もつともだけどぼくが戦う事なんて出来れば遠慮したい。

「わ、わかつたよ。この森が吹っ飛んでも知らないからな！」

ぼくは立ち上がり右手の拳銃を構え、引き鉄に指を掛けた。

「おー、そんな威力がそんなにちっこいのから出るのかあ……がんばれー」

テキトウな冗談によくわからない応援。ぼくは銃の反動に備え身を硬くする。

手のひらが汗ばんで胸の鼓動が聞こえる。不思議世界の銃とはいえ、拳銃を撃つなんて緊張する。銃を握る手に自然と力が入る。

「ええい！」

カチ

引き鉄を引く音が静かな森に響いた。

……………

静寂。森の生き物全てが眠りに付き。風すら凪いで、音の無いとにかく静かな世界。

「あ、アレ?」

カチツカチツ

あっけに取られて何度も引き鉄を引くが、一切銃は反応しなかつ

た。一気に身体から緊張と力が抜ける。

「ぷ……あはははは」

笑いだすエルフィ。急に恥ずかしさがこみ上げて来る。

「な、なんだよ！ きつと弾が必要なんだよ！ 残念だなあ打て無くて！」

矢継ぎ早に言い訳するべく。内心では打てない事にホツとしていた。

「だって……『森が吹っ飛んでも知らないからな』とか言っていたくせに」

そう言っただけ笑いつけるエルフィ。最初は神秘的なイメージの彼女だったけれど、こうしてみると大分普通の女の子に見えた。

それから大分バカにされながら、リンドヴルムの仕舞い方を教わり。役立たずの銃は不思議な光とともに、ふわりと何処かに消えた。

それからまた、お互いの世界の事を話ながら森を越え、草原を抜け、道とも言えない道を行くと、大きな跳ね橋の架かった川に囲まれた村に着いた。

「さて、ここまで来たのは良いけど、どうしよう」

突然エルフィが、跳ね橋の前で立ち止まり、ぼくを見る。

「どうしようって？ 何か問題でもあるの？」

ぼくを見て唸っているエルフィに疑問を抱く。

「んー、ここって隠れ里な訳なんだけどさ、男が居ないのよね」

「はい？ それってぼくは入れないって事？」

ここまで来てそれは非常に困る。

「いや、それはまだわかんないと言うか……長の許可が出れば良いんだけど……こんな時間だし……」

「う、じゃあぼくは朝までここで過ごすしかないのか」

それも仕方ないと思い始めた時。跳ね橋の向こうで、光がぼんやり輝きだした。

「あ、ケルンがこっちに気付いたみたい……ちょっと行つて来るね」
そう言つて小走りに行つてしまふエルフィ。

ぼくはたちまち不安になる。異世界で一人になる不安。自分の世界とまったく違う法則に満ちた世界……ただでさえ無力な高校生だったぼくは一人では何も出来ない。

急に押し寄せた不安に身を震わせていると。何とか視認出来るところでエルフィが大きく手を上げ、おいでおいでと招くように手を振っている。

ぼくは招かれるまま跳ね橋を渡る。心なしか、歩くのが早くなっているのは、一人で居るのが不安だったからなのかもしれない。

「良かったねー！ 楓！ 入つて良いつてさ！ ミイちゃんが予言してくれていたんだつて！」

跳ね橋を半分くらい渡つた所でエルフィが大きな声で教えてくれる。予言とか聞こえたけどこの際何でも良い。とりあえず一人で居る不安から逃げられる事に安堵していた。この後に待ち受ける事など何も考えずに。

エルフィの元へ辿り着くと何やら褐色の肌に長いパーマのかかった髪を片側にまとめたスレンダーで背の高い女性と会話していた。

「この子が楓、こつちが見張り番のケルディ・ミリアンダ。みんなはケルンつて呼ぶわ」

軽く紹介してくれるエルフィ。ケルンと呼ばれた女性はぼくの事を物珍しそうに値踏みしている。

「本当に男なんだなあ、大丈夫なのか？ エルフィ？」

よほど男が珍しいのか、かなり怪しまれているようだった。

「大丈夫。楓つて異世界から来たらしいし。何より弱いから」

クスクスとさっきの事でも思い出しているのか、笑いながら言うエルフィ。確かに弱いのだろうけれど、そこまではつきり言われると傷つく。

「ええと、はじめましてケルンさん。御巫 楓つて言います。森でエルフィに助けてもらいました」

とりあえず失礼の無いよう挨拶する。

「はじめまして。異世界には差別文化は無いのかい？ か弱いボウヤ」

差別？ 何の話だろう…… か弱いボウヤは酷い言われようだ。

「ちよつと！ ケルン！ それは今言う事じゃないでしょう！？」
エルフィが声を荒げる。『か弱いボウヤ』はかばってくれないの
ね…… まあ良いけれど、もう慣れてきたし。

「ミイと長が何と言おうが、あたしはまだあんたを信用した訳じゃないからな」

棘のある不信に満ちた言葉に心がチクリと痛む。初対面でこんな
に嫌悪されるものなのだろうか？

「もう、行こう！ 楓」

エルフィに引かれ門を通る間も鋭い目がぼくを離さなかった。

村はキャンプ場で見えるような丸木で組まれた簡素な家がポツポツ
とある少し古めかしい感じのする集落だった。

「気にしないでね、ケルンってば責任感強いから、ちよつと警戒し
過ぎなのよ。里のみんなはきつと大丈夫だから」

そう言つてエルフィは少しおどけたが、ぼくは不安になっていた。
男の居ない隠れ里。あの嫌悪感を抱く人が他にも居るかもしれない。
ぼくは、まねかねざる来訪者なんじゃないだろうか？

「そついえば差別がどうのつて言つていたけれど、どう言う事なの
？」

『異世界には差別文化は無いのかい？』と言つ言葉が引つかかつて
いた。

「あー……それは……」

エルフィの表情が曇り、声が詰まる。

「ぼくには良くわからないけれど、この世界にも差別つてあるんだ
？」

ぼくの世界にも人種差別や身分差別など確かにあった。ぼく自身
には縁の無い話だけれど、気分の良い話では無いことは確かだった。

「わたし達がね、隠れ里なんかに住んでいるのは、差別されているからなの」

エルフィが意を決した様に早い口調で告げる。

「わたし、見ての通り不細工でしょ？ わたし達の世界では恥ずかしい話だけれど不細工に人権は無いような物なの」

確かに、程度の差はあるけれど、学校でもそんなイジメがあった事がある。ぼく達の世界も考えてみるとそんなに綺麗な世界では無いのかもしれない。

「!？」

真面目に考えていると腑に落ちない点がある事に気付く。

「エルフィが不細工!？ どこが!？」

どっからどう見ても美人だ。線が細くスタイルも良いし、何より整った目鼻立ちに透き通るエメラルドグリーンの瞳と、流れるような白金に近いさらさらの髪が今まで見たこと無いほど綺麗で素敵だった。今でこそ慣れて来たものの、未だに覗き込まれるように顔を見られると照れてしまう。

「え、どっつて、痩せ細っていて、目とかも大きくて……気になる所あげたらキリが無いくらい……」

エルフィは塞ぎ込んで行く。さっきまでの陽気さが嘘の様だった。「ちよつと待つてどう見たってエルフィは美人だよ!」

女の子に向かって面と向かってこんな事を言うのは非常に恥ずかしい。でもやっぱり納得がいかなかった。

「あはは、楓って優しいなあ。お世辞でも嬉しいよ。ありがとう」
しかしエルフィは完全に諦めた様子で意気消沈していた。美人と言言葉も全然間に受けていない。

「いや! 少なくともぼくの世界ではエルフィは絶世の美女だと思うよ。ぼく自身もかなり美人だと思っっているし……」

まるで口説いている様な褒め方だけれど、本当の事だから仕方無い。どう考えてもエルフィは美人だ。

「何か、そんなに言われると照れる……。そんな風に言われたのは、

はじめてだし……」

頬を赤らめ、同様しているエルフィの姿はやっぱり可愛かった。こんな女の子が魔物と呼ばれる獰猛な獣と対等に渡り合っていたのが今でも信じられなかった。

「と、とにかく！ エルフィは綺麗だし、命の恩人だし、ぼくは絶対に差別したりなんかしないよ！ 元々、そうゆうの何か違ってると思うし……」

ぼくは恥ずかしいのを「上手く言えないけどね」と笑ってごまかした。

「ありがと……」

エルフィの消え入りそうな声が微かに聞こえた。

「さ、着いたよ。ここがわたしの家」

しばらく村を歩いた所でエルフィの家に着いた。家は他の村の家と変わらず丸太で組まれたペントハウスの様な素朴で質素な家だった。

「もしかして、エルフィって一人暮らし？」

家族の話や、同居人の話などはここまでの移動でも聞かなかった。「そうだよ？ まあ一人暮らしって言っても、村のみんなが家族みたいなものだから、寝る時が一人っただけなんだけどね」

今まで色々あって考えて無かったけれど、ぼくはこの美少女と二人きりで夜を過ごすのか……エルフィは何とも思っていないのだろうか？

「さ、入ってー何にも無い家だけどね」

そう言って自分の家に入っていくエルフィは、まったく気にしていない様子でいた。

入り口に入っただけの大きな花に、あの不思議な光を当てると、部屋全体を見渡せる程の淡いオレンジの光が灯った。それを見て、改めて自分は異世界に居るのだと痛感する。

「この花、すごいね。まるで電気みたいだ」

ぼくは女の子の部屋と言う事に緊張しながら、異世界の不思議

に戸惑っていた。

「増光花も知らないの！？ 本当に違う世界から来たんだねえ……」
「やっぱりエルフィも信じきれずに居たのだろう。そんな怪しい相手を助けてくれて、面倒まで見てくれるのだから、エルフィの優しさに感謝しなければならぬ。邪な考えを抱いていた自分が恥ずかしくなった。」

「邪魔します」

ぼくはおずおずと部屋に足を踏み入れる。靴を脱いだりする必要は無いらしく、普段と勝手が違ってなんだか落ち着かない。

エルフィの部屋は外見同様中も質素で、テーブルやベッド等はぼくの世界とあまり変わらず、『女の子』を感じる部屋で無い事は、少しだけ救いだっただかもしれない。

「はー、疲れたあ……今日はもう寝て、明日長の所に行こう。そしてたら楓の事何かわかるかもしれないしね。あ、楓はベッド使って良いよ。わたしはその辺で寝るから」

全然疲れているようには見えないエルフィは、床を指差し、とんでもない事を言い出す。

「ちょ、流石にベッドは良いよ！ そこまでお世話になれないって！ と言うか女の子を床に寝かせるなんて出来ないって！」

「へ？ だって楓クタクタだったじゃない、ベッド使ったら良いのに……」

なんていい子なのだろう。でも甘えるわけにはいかない。男のプライドにかけてそこは譲れない。

「いや、大丈夫！ とにかくベッドはエルフィが使って良いから！ ぼくは家に泊めてもらえるだけで十分だし、実際戦ったのはエルフィなんだからゆっくり休んでよ」

ぼくは必死に説得して床で寝る事になった。今はエルフィが寝巻に着替えると言うので、外で一人これからを考える。これから一体どうなってしまうのだろうか？ 長なら何かわかるかもしれないとエルフィは言っていたが元の世界に帰る事は出来るのだろうか？

考えれば考えるほど不安が溢れて来る。考えることは沢山あつて、すぐに着替え終えたエルフィが出てきた。

「もういいよー」

すっかりとした着物姿だったエルフィは浴衣の様な軽い服装になっていた。体の線が前よりはつきり出ていて頬が熱くなる。

「どうしたの？ 顔赤いよ？」

浴衣姿に見惚れていたなどとは言えず「なんでもないよ」と誤魔化して、邪念を振り払う。と言うか恩人に何を考えているんだばくは……

しかし、このやりとりでさっきまでの不安が和らいだのは救いだつた。

この後、毛布を借りて床で寝るのだが、思ったより疲れていたのかすぐに眠りに落ちてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3277t/>

双月想話

2011年6月11日22時10分発行